

---

# 人は食べ物です

水銀。杏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人は食べ物です

### 【NZコード】

N3591T

### 【作者名】

水銀。杏

### 【あらすじ】

『人肉食用化』された日本。これが本当の世界か分からぬ。誰がこの法律を決めたのか…。喰つか喰われるかの世界。

## プロローグ

私は夢を見ているのかも知れない。

小さい頃はちゃんとした生活をしてたはずなのに、いつの間にか、ありえない世界になっていた。

それは…人が人を食べるということ。

実際は食べることなんて許されていないが、この世界では当たり前のようく食べている。

酒やたばこ、薬物的な要素のようだ。

興奮作用・幻覚など、人を快樂に落せる魅力。

薬物に含まれる依存性はなく、誰も躊躇がないようだ。

もちろん、自分の体も食べることが出来る。

何故か生えてくるのだが、心臓か脳を食すと再起不可能らしい。

そして…

私は今の状況を疑っている。

「私知ってるの、お前がナイトメアを殺したことを

ナイトメアは私の弟である。

私は18歳で、弟が15歳。

話しかけているのは、

「自分より若い奴の脳は、熟した中年より美味なんだよ。…セナ?」

セナは私の名前。

そして、コイツは柚原<sup>コズハラ</sup>。幼馴染みであり、彼氏である。

柚原は私の家に来ると、ナイトメアとゲームで遊ぶぐらい仲が良か

つた。

なのに「ヨイツは、弟を食べたのだ。

「アツチの世界で、殺しておくべきだった……」

これは私が体験した

変わった世界の話である

## プロローグ（後書き）

次話 今週中

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。  
感想・誤字等受け付けます。

## 1・日本の異常（前書き）

本格的に話が始まります。

## 1・日本の異常

私の両親はナイトメアが産まれ、数日後自殺した。祖母の家に住むことになったが、病の為に6年前に亡くなってしまった。

今は私とナイトメアとの二人暮らし状態になっている。

「お姉ちゃん、夕飯まだー？」

「もうすぐで作り終わるから、テーブルの上を片付けてね」ナイトメアは広げた宿題を片付けながら、カレンダーを見た。

「…今週の土曜日、アイツ来るの？」

「ん？ 柚原のこと？…来るけど？」

悲しげな顔をしながら私を見た。

いつもなら來るのが分かつたら喜ぶはずなのに。

「なんで？」

「アイツ…前に來た時、僕を殴つたんだ」

「！？」

ナイトメアは泣き顔で話始めた。

先週の土曜日に柚原が家に來た。

私と話してから柚原は、いつものようにナイトメアとテレビゲームすることになった。

楽しげに遊んでいるとこを見て、私は夕飯の材料を買いに行くことにした。

それからだつた…

「最初は頭を叩いた…そして頬を」

じやれてるつもりだと思ったみたいだが、力は本気だつたらしい。

私が買い物から帰つて來た時には、柚原は帰つていた。

「…ナイトメア？」

一人でテレビゲームをしている。特に変わった様子はなかつたが、

「お姉ちゃん…あの」

「まさか…あの時言った、口の中切ったのって…」

「ナイトメアは口を大きく開けて、私に見せた。

口内炎が潰れたように、出血した後があった。血はもう止まっている。

「でも、なんで柚原に殴られたって言わなかつたの?」

「だつて…お姉ちゃん、柚原のこと好きじゃん?」

「それとは別の話でしょ?」

私は柚原の家に行くことにした。自転車で5分くらいのところに住んでいる。

「なんだよ…」

チャイムを鳴らすと、柚原が出てきた。

「なんでナイトメアを殴ったのよ?」

すると柚原は一旦家の中に入り、新聞紙を持ってきた。

「このニュース知ってるか?」

私に見せたのは、大きく貼りだされた写真だった。

写真には内閣総理大臣が写っている。

見出しひには、『人肉食用化』と書いてある。

「何これ…」

私は経済的の問題で新聞は買つておらず、

学校と家事の両立でテレビニュースを見る機会がない。

だから、このニュースを知つたのは初めてだ。記事を隅々まで読む。

『人肉を食用化について 実験・解剖・論文等の結果から、

人肉は食しても遺伝子や染色体に変化がなく、脳細胞にも異常が見られなかつた。

一部には化学反応を示す人間もいるが、大抵の人間は食しても大丈夫らしい。

効果は嗜好品と一緒にのよつで、依存性はかなり低い。  
自分の人肉・他人の人肉（得る場合は許可が必要）は、心臓か脳を  
食さない限り復活が可能』

疑うしかなかつた。

こんなことがあつていいのか？

「柚原……」

「自分より若い奴の肉はおいしいみたいだな」

「まさか、ナイトメアを食べるつもりで殴つたの？」

柚原は笑つている。

「んなわけないだろ？… ただ、俺の方が上だつてことを教えただけ  
だ」

そう言いながら、家のドアを閉めた。

またチャイムを鳴らすが、出てくる気配はなかつた。

私は柚原に新聞紙を返し忘れた。

「これ…ナイトメアが見たら…」

その新聞紙を片手に、家に戻ることにした。

## 1・日本の異常（後書き）

次話 0521～0523のビックで  
最後まで読んでいただき、ありがとうございます。  
感想・誤字等受け付けます。

## 2・これは眞実

家に着いて、夕飯を食べ、自分の部屋に入った。  
もう一度新聞紙を広げる。

信じていいのか分からぬ記事…人の肉つて、  
「…食べれるもんのかな？」

私は軽く右手の人差指の先を噛む。いくらなんでも本氣は出せない。  
思いつきり噛めば、皮膚がちぎれるのだろうか？

内出血だけで終わるのではないか？

試したくはないが、どうなるのか気になる…。

「うう…」

横になる。

こんなことは考えたくないが、

人肉の味が気になつてしまふがいい。

「柚原が見せたのは今日の新聞…前からこんなことが話題になつて  
たのかな？」

深く考へるのはやめて、もう寝ることにした。

次の日、自転車に乗つて高校に向かう。

朝、新聞に載つていたあの記事がテレビニュースで流れている。  
キヤスターも評論家も政治家も、誰も否定していなかつた。

私が知らない間に、この話が進んでいたのかな…。

「ニュースつて見ないとダメだわ」

もちろん、私のように『人肉食用化』を反対してゐる人だつてゐるは  
ず。

学校に向かう途中の信号が、赤信号になつたため止まつてゐると、  
私の隣に一組の親子が来た。お母さんはまだ若く、男の子は幼稚園  
児のようだ。

(…ん?)

男の左手首に包帯が巻かれていた。

（どうしたんだろ…）

お母さんが男の子を見ると、男の子は一ヶコリと笑った。

「ママー、きょうになつたら、てぐびのきず、なあつてるかなあ？」

「昨日噉んだばつかでしょ？まだ治らないよ」

すると、親子は声を出して笑っている。

（噉んだって…男の子が…）

青信号になり、親子は手を上げて進んだ。

学校に着くと、玄関で友達と会った。

「セナ！おはよう」

「菊ちゃん！おはよー」

同じクラスの菊ちゃん。少し天然なところがあるが、可愛い女の子だ。

クラスに入ると、いつもどおりに賑やかだった。

「セナあー菊うー」

「ゲムッ…うわーー！」

いきなり飛びついて来たゲムファ。私の友達。幼い感じがある女の子。

「sakuが一人が来ること待つてたんだよおーーね、saku？」

「…待つてた」

窓際の席に座つてたsakuが私のところへやつてきた。

あんまり表情を変えない大人しい女の子。普段はこの4人でいることが多い。

「saku、なんかあつたの？」<sup>サク</sup>

「セナ…この記事知つてる？」

「…ああ」

sakuは机の上に週刊誌を開いた。そこにはあの『人肉食用化』の記事が載っている。

私は軽く頷くと、sakuはある一文を指差した。

「ん？」

「…」

「『高校生以下のお子様を持つ家族様へ』…って？」

「高校生以下…ナイトメアが該当する。

「朝刊にも詳しく述べた…セナ、新聞買つてないでしょ？」

sakuは私に週刊誌を渡す。一文の下に、箇条書きで何かが書いてある。

- ・3歳未満のお子様…親の同伴を強制 15時以降は家から出れない
- ・幼稚園児…親の同伴を強制
- ・保育園児＆保育所…終始、警備を設ける
- ・小学生…授業は14時まで 先生同伴の集団登下校
- ・中学生…授業は15時まで 集団登下校

「何これ…」

「若い奴の肉が狙われるってやつだよ…前に女の子が誘拐されたってさ」

菊ちゃんが複雑な顔をしている。そういうえば、小学生の弟がいるんだっけ？

「でも、ナイトメアこんなこと書つてなかつたのに…」

「正確には今日からだから…学校でプリントとか貰つてくると思つ」

「今日からつて遅いよね…、結構前から話題になつてるのに」

私はsakuに週刊誌を返すと、菊ちゃんと田を呑わす。大きなため息をつく菊ちゃん。

「あの時は少子化が問題だつたのに…子供が増えたとたん、変な制度作るなんて」

？

「あの時つて…？」

私が菊ちゃんに聞い出すと同時に、チャイムが鳴った。

2・これは眞実（後書き）

次話 0522(10時)  
感想・誤字等受け付けます

### 3・君を見て

授業中、

(私、いつから「ニュース見てないんだろ?」)

菊ちゃんや朝のニュースでも言つてた:「これは前から話になつている」と。

でも、私が知つたのは柚原から新聞を見せてもらつた昨日のことだ。いくら家にいるときは家事に追われて大変でも、テレビは見てるはず。

つていうか、こんな話が出たら学校で話題になつてるはずだし…。  
(なんで…何も知らないんだろ?)

放課後、部活動に参加してない私たちは帰る準備をした。

「菊ちゃん、弟大丈夫?」

「ん?お母さんが学校へ迎えに行くみたいだし…大丈夫だよ。セナの弟は?」

「集団下校っぽいし、近所に友達いるからね」

ガラツ

「セナいるか?」

「!?」

隣のクラスの柚原が教室に入ってきた。

私のところにやつてきたが、目をわざと逸らした。

「話がある。一緒に帰るぞ」

「あ、菊ちゃんと帰るから…」

「いいよ…いいよ…セナ、一緒に帰っちゃいな!」

「はあ?」

「ありがとな」

菊ちゃんに強引に押され、柚原と帰ることになつた。

自転車登校してない柚原は、私の自転車で一人乗りして帰ることになつてゐる。

「一緒に帰るの久しぶりだな」

「…」

「おもひ」

「つるわい！」

周りからみれば、カップルに見えるかもしれない…まあ、付き合つてるのは確かだが。

「どこで話すの？」

「俺の家」

「え？」

「…なんもしねえから」

付き合い始めたのは中学3年の時、幼馴染みで仲が良かつた私と柚原。

同じ高校へ入学することがきつかけで、付き合つことになつた。付き合つのはよかつたが、正直、男として見ることができない。お互いの家に遊びに行つても、話したりゲームするぐらいで、カップルらしいことはしたことがない。もちろんデートも。キスはしたことあるけど。

友達感覚だが、皆から公認カップルとなつてゐる。

「まあ、座れよ」

柚原の部屋に入り、クッションに座る。

「話つて何？」

すると、柚原はカッターで自分の左手の小指の先を切つた。

「…？」

少しずつ血が出てくる…

「なにやつてんの」

「…舐めろ」

血を私の口の前に出す。

「ちょっ…

「いいから!」

私は思いっきり田を閉じ、ペロッと舐めた。

「…、…んー?」

「だろ?」

血は鉄の味がする…しかも、人の血なんて…と、思った。

一瞬にして何かが変わった。

「おい、しい」

甘さと刺激が、足元から頭へと伝わる。

「俺も最初は驚いた…。」これぐらいの切り傷なら2時間ぐらいで治るからな

「…でも痛いでしょ?」

「そーでもない」

柚原はさつきの切り傷に再びカッターを喰い込ませた。

傷口は広がり、血がポタポタと流れ落ちる。

「!??」

「どんなに切つても、皮膚や肉や骨は生まれ変わる…だが、神経だけは無理らしくてな

「?」

「指を切つたのは初めてじゃない。神経がないから痛みなんかねえよ

何故か私は関心した。

一度痛みを我慢すれば、永遠に食すことができるのだ。

「…そうなら、なんで子供を狙う人がいるの?」

また生えてくるなら、自分の食べればいいのに

「そりゃ俺と違つて、自分を傷つけたくない奴だつているからな。

抵抗を知らない子供を食べたがる奴が多い。しかも、脳ミソや心臓が小さく凝縮されて、

新鮮でおいしいってネットで流れてるんだ

狙わない奴がおかしいだろ?と、柚原はニヤニヤしながら言つた。

昔から何を考えているのか分からぬ時がある……そこがたまに怖い。  
「安心しろ、弟にはなんもしねえよ。また遊ぶ約束してるしな」

柚原は血がついた指先を、私の唇になぞり、それを舌で舐めた。

### 3・君を見て（後書き）

次話 0525（10時）  
感想・誤字等受け付けます。

#### 4・だから嫌い

「お姉ちゃん！お腹空いたよー」

「あーごめんね！今作るからー」

帰宅した時は18時を過ぎていた。

宿題を済ませ、テレビゲームをしているナイトメア。

そつか、14時に学校終わったから早いのね。

テーブルの上には、一枚のプリントが置いてあった。

あの週刊誌に載つてあつた記事と同じことが書いてある。

「ナ…」

学校でどんな話を聞かされたのどうつか…と、気になつたが、聞くのを避けてしまつた。

冷蔵庫を開けると、もう食材が少しあなかつた。カレーライナ

ら出来るかな？

野菜を切つていると、視線を感じた。ナイトメアがこっちを見てい

る。

「…どうした？」

「お姉ちゃん、アイツの家に行つてたでしょ？」

「だから？」

「僕、アイツ嫌いだからね」

ナイトメアの声は、低く張つていた。まあ、殴られたらこんな態度にもなるか…。

「柚原謝つてたよ。それに、今度またゲームで遊ぶんでしょ？」

多分、柚原はナイトメアと約束した後、殴つて帰つたのだろう。

「明日来るから…。あ、私がいれば大丈夫でしょ？」

ナイトメアは浮かない顔をして、ゲームを続けた。

私は一呼吸して、また野菜を切り始めた。

下唇を軽く噛んだ。まだ柚原の血と唾液の味が残つている。

よく分からぬ感覚に落されかけた…それはすごく実感した。

できたカーラライスをテーブルへと運び、食べて、風呂に入つて、寝ることにした。

その間、ナイトメアとの会話はなかつた。

朝、田が覚めた。

昼過ぎに柚原が来るから、ギリギリまで一度寝することにした。ところより、体が上手く起しきせないぐらに、疲労が増していた。ピンポーン……

誰かきた……耳では聞こえてるのに、体が動こつとしない。

「お姉ちゃん! ピンポン鳴つてる! ! !

1階からナイトメアの声が聞こえた。

朝早くからやつてゐるアニメを見るのが口課のナイトメア。もちろん、土日は私より早く起きている。

「お姉ちゃん! ! ! もう! !

私がまだ寝てると思つたのか、玄関のドアを開ける音がした。ガチャ……

その音を聞いたとたん、瞼が急に重くなつた。

「……」

再び目が覚めると、時計の針は13時を示していた。

私はクローゼットから適当に服を出して着替えて、1階へ下りた。

「ナイトメア! ! ! 柚原……が……」

目の前に広がる光景を見て、一瞬で驚愕した。

リビングの床や壁が、真つ赤に染まっていたのだ。

「あ……あ……」

私は足に力が入らず、ガクンッと座り込んだ。座つたとこも、血がベッタリと溜まつていた。

テレビの音に気付き、そつちを見た。

この音はナイトメアがいつもやつてるテレビゲームの音だ。だが、ゲームをやつてるのはナイトメアじゃない。

「柚原…」

「…ん？」

柚原はこっちを振り向く。口の周りには血が付いている。頭の中で何かが途切れ、そして繋がった。

「食べ…たの？ナイトメアを…」

「…」

自分の服の袖で口を拭いた。そして、笑う柚原。

「俺が知るか」

そういうと、柚原は持っていたゲームのコントローラーを、床に思いつきり叩きつけた。

#### 4・だから嫌い（後書き）

次話 0527（10時）  
感想・誤字等受け付けます。

## 5・隠れてる

柚原は白から真っ赤になつたソファーに座る。服全体が血まみれだつた。

目を瞑わせているのが怖い…。今の私、青ざめているに違いない。震える。ベチャ…と、掌にナイトメアの血がつく。

「あ…あ」

「…セナ」

柚原は私の頭を撫でた。

「本当のこと知りたかつたら、ここ綺麗にしてから俺の家に来い」笑いながら家を出た柚原。

数分後、パトカーのサイレンが聞こえ、警察官が入ってきた。

「セナ！」

「あ…菊ちゃん」

私は保護され、警察の待合室に菊ちゃんが来てくれた。

今私の、身内がいなかつた。

「あとでsakuroとゲムファが来るからね！」

「…ありがと」

まだ震えが止まらなかつた。

シャワーを借りたが、爪の隙間に少し血が残つている。

菊ちゃんは警察から事情を聞いたらしく、優しく抱きしめてくれた。

「一体誰が…」

『柚原』と言えば、全てが解決するだろ？…だが、それは時間の問題。

指紋、だつて残つてるし、柚原は血まみれだから、誰かが通報してくれたんだ。

警察が私のここに来た。

「ナイトメアさんは…あなたの弟さんですか？」

「…はい」

書類に何かを書くと、その場から立ち去つて行つた。

「菊」

「あ、saku!…?」

sakuの後ろに、誰かいる。ゲムファじゃない。

「saku…その人は?」

「…お父さん」

「はじめまして、sakuの父のtakumatoda<sup>タクマツダ</sup>だ。ここ<sup>タクマツ</sup>の警察

長を務めている。

セナちゃんの事件については、全力で協力しよう!」

厳つい人が、笑顔は明るかつた。

「セナの家で調べることがあるらしいから、今日は私の家に泊まつて。ゲムファにも伝えた

「ありがと…saku」

外で待つていたタクシーに乗り、sakuの家へと向かつた。

モノトーンで落ちついた部屋。数分後、ゲムファがやつてきた。バイトで店長に怒られて遅れたらしく、その話で少し盛り上がつたが、

話が終わると、長い沈黙が続いてしまつた。

友達の身内が死んだんだ、ずっと笑つていられる場合じゃない。この気遣いが、セナには深く伝わつた。

「あの…」

「…?」

言えはいいんだ。アーツの名前を…ナイトメアを食べた奴の名前を。

「…」

「セナ?」

口が上手く動かない。言つたらいけない気がした。

なんでもない…それだけ言つて、いつの間にか眠りについていた。

早朝、携帯電話のアラームが鳴る。

普段から早く起きているセナは、自然と目が覚めた。

皆は…起きそうにない。

アラームを止めると、携帯電話にメールが来ているのが分かった。

『新着メール6件』…全部柚原からだ。

着た順から開いていく。空メールが続く…そして6件目、やっと文

が書いてあつた。

「…え？」

そのメールは今さつき着たものだつた。

『友達の家にいることは知つてゐる。

起きたらすぐに俺の家に来い』

## 5・隠れてる（後書き）

次話 0530（10時）  
感想・誤字等受け付けます

## 6・愛してゐるお前を

「セナ…どこ行くの?」

「あ…」

布団を片付ける私に気付いたsaku。  
私は柚原のメールに従うこととした。

「ちょっと散歩してくるね」

「…一人にも伝えとく」

まだぐつすりと寝ている菊ちゃんとゲムファを見た。

「セナ…早く帰ってきてね」

軽く頷いた。なんか、悲しそうな顔をされた。

柚原の家の前に着くと同時に、家のドアが開いた。よく見慣れた顔  
が私を見る。

「早かつたな」

「…」

「飯食べたか?」

「…」

自然と首を横に振った。昨日、ショックで何も食べることが出来なかつた。

「今作つた、食べるか?」

「…人?」

「違う…いいから入れ」

モグモグ

「おいちいー」

2階にある柚原の部屋へ。出されたのは、ハチミツがかかったフレンチトースト。

柚原は普段から冷たくて、口が悪くて、態度がデカくて、目がつり

上がってるのに…

「朝からファンタジーな朝食ですね！」

「おい。…謝れ」

久しぶりに自分以外の人が作る料理を食べた。

何枚でも食べれそうなぐらい美味しい。でも…「コイツは

「柚原…なんで、ナイトメアを殺したの？」

「…正確に言うと、殺してない」

「食べたの？」

「ああ」

あまりにも即答すぎて、頭がキレた。

持つてるフォークを柚原に向けて投げたい気分だが…それが出来ない。

私は「コイツのこと」をよく知ってるから。

「話、最後まで聞けるか？」

「…つ」

「食べ終わってからな」

柚原は嬉しそうだった。

空いた皿をキッチンに持つて行つた柚原。

改めて思う…私は柚原の部屋の「オイ」が嫌いだ。

二人でいる時は分からぬのに、一人になると、すぐ分かる。

（心のどこかで…認めてんだろうね。柚原のこと）

目線を下に落すと、前に来た時に柚原が流した血が、カーペットに染みていた。

…そういえば、お父さんいないのかな？

柚原の両親は離婚して、今お父さんと住んでると聞いたことがある。仕事なのかな…まあ、聞くほどでもないか。

（…あれ？）

私はもう一つ、別の疑問が浮かんだ。

ガチャ、柚原が戻ってきた。

「ん」

あつたかい「一ヒーを淹れててくれた。

「ナイトメアのこと、言つてよ」

「…俺がセナの家に行つたのは、お前が起きてくる数分前だ」

「…は？」

柚原は面倒臭そうに話始めた。

「俺はドアの鍵が開いてたから、勝手に入つたんだ。そしたら、リビングから物音が聞こえた。

覗いたら血まみれになつててな…そこにガキが一人いた。しかもナイトメアに似た奴が」

「！？」

「そいつは何かを食べてた…んで、俺に気付いて急いで家から出て行つた。

顔は見えなかつた…そいつが座つてたとこに腕が落ちてた。大きさ的にナイトメアだと分かつた。

俺はそれを喰つて、ゲームを始めようとしたら、セナが下りてきた  
…それだけ

「え…」

柚原はナイトメアの腕しか食べてないの？

ナイトメアに似た奴？どういうこと？あ…

そういうえば、朝一度起きた時にドアが開く音がした…そいつが入つてきたつてこと？

「柚原じやないの？」

「犯人扱いすんな…まあ、そのうち警察を敵に回すけどな。それと、

「私は新聞紙を渡す。今日のだ。

「？」

「見れば分かる」

「え…」

小さい記事だが、私は驚いた。

## 6・愛じてゐるお前を（後書き）

次話 0602（10時）  
感想・誤字等受け付けます。

## 7・ただ守る（前書き）

後書きに作者からエードモココメントあつ。

## 7・ただ守る

「偽者?」

その小さな記事には、こう書いてあった。

### 謎の組織と人身売買

先日、都内某所で女子高生（17）の死体が発見された。衣類は着ておらず、両足切断、胸部のところは完全に切り開かれ、心臓はなかつた。

指紋等から無職の男性（42）、他4名が逮捕された。

男性は『ある組織から女を買つた』と、話している。

女子高生の両親は事件当日、『死んだはずの弟と知らない人たちが家にやつてきて、

娘を連れていった。弟は数日前誰かに殺された』と、話している。今、謎の組織によつて家族の『偽者』が作られているようだ。

『偽者』は『本物』を殺し、家族になりきり、家族を暴走族やホーミレスなどに売りつけるらしい。

謎の組織については、捜索中。

「…」

「と、いうことだ」

明日ぐらには大きく載るだろつな… 柚原はつぶやく。

「じゃあ、ナイトメアの『偽者』がどこかにいるつていうこと?」

「多分な… そいつ、俺のこと殺したかつただろつよ」

「なんで?」

「計算外だろ、ナイトメアを食べてるところを見られるのは。でも、

時間が掛かり過ぎた。

俺の存在を気付かないぐらい必死で食べてた。証拠を残さないために。それで、

俺を殺してたら、時間がないと思つて逃げたんだろ」

「え…」

「俺を殺したら、セナの前に現れるだろうつな」

「そんな…」

私は少し混乱していた。

柚原も私も狙われている。もし、柚原が殺されたら…。

「うう…」

涙腺が一瞬で緩んだ。怖くてしようがない。

『偽者』だけだったらまだしも、集団で来たら勝ち目がない。

…安心しろ、俺が守るから

柚原が私を抱きしめる。何も答えず、胸の中で甘えた。

夕方

「『めん、s a k u。柚原の家に泊まる』こととする」

今、外に出るのは危ない。しかも、友達を巻き込むことせずに済むとい。

『そつか…、なんかあつたら連絡してね』

「ん、ありがと」

そう言って電話を切つた。

「…」

「セナ、夕飯出来たぞ」

「うん」

テーブルには、様々な料理が並ぶ。

「わー、全部冷凍食品ですか！」

「…作つた」

とつあえず椅子に座る。やつこくれば、

「ねえ、お父さんは？」

一緒に住んでると聞いたのに、お父さんがいる気配がまったくない。

「離婚の原因が、親父の浮気だからな。浮気相手のとこだろ？」

数ヶ月前から家には帰ってきてないらしい。

それと、もう一つ疑問があった。

「柚原…妹いたよね？」

「いねえけど…」

「…？」

ピンポーン…。

チャイムが鳴った。

「誰だ？」

柚原が席を立つ。私も必然的に立つてしまった。

「お前は来るな。俺の部屋行つてろ」

「嫌」

一緒に玄関へと向かう。

あれ？…柚原に妹がいた気がしたのに。前にも、こんな感覚があった。

私が知らない『時間』<sup>トキ</sup>がある…。

菊ちゃんが言つてた『あの時』、そして『今』。

『あの時』がいつのことなのか分からぬけど、『今』との間が思  
い出せない。

ガチャッ

「！？？」

私は柚原の背後に隠れ、横からチラリと覗く。

そこにはスーツを着た二人の男…そのうちの一人は見たことがある。

「sakuの…お父さんつ！」

「警察だ。柚原君、署に来てくれるかな？」

恐れていたことが起きた。

## 7・ただ守る（後書き）

次話 0607（10時）  
感想・誤字等受け付けます。

作者から

いつも読んでいただき、ありがとうございます。  
感想など、とてもうれしく思つております。（返事等返せなくて『  
メンナサイ！』）

話の設定が混乱してきたので、次話の投稿日を延ばさせていただき  
ます。

そして、予告なしで番外編を更新しますので、  
『ぶっちゃけ、この話よく分かんねえよーこのバカチンがあー』つ

て人は、  
番外編を読んで下さい。とくに興味がない人は、0607に！それ  
でわっ！

## 番外編 1 この話の設定（前書き）

設定だけなので、  
読むか読まないかは、あなた次第です！

『人は食べ物です』

：いいえ、ケフィ「yu

と、いうことで、番外編書いちゃいますね。  
まず時代背景。

少し未来の日本。4月と5月あたりの春。東京みたいな大きな都市  
にセナ達は住んでいます。

名前が漢字だつたり、カタカナだつたりしますが、世界観を変える  
ためです。

基本的にそれが名前です。『柚原』は苗字ではありません。

ある時、

科学者が『人肉は食べれるよ!』と発表したら、  
政府が『じゃあ法律にしちゃえ!』ってことで、  
『人肉食用化』という法律ができました。

知つてると思いますけど、フィクションですからね!

食べても異常が出ない。

身体の再生が可能(それなりの栄養素を摂れば、すぐに再生します)

神経は再生不可能(一度切つたところは、再生しても痛みを感じない)。

味は人によつて違うが、基本美味しいらしい。

食べれば、酒・煙草・薬物のように、快樂を得る。

依存性が無く、いくらでも食べれることが分かつた。

だが、脳か心臓を食べると、全体の再生が不可能になり、死んでしまつ。

若い者は身がしまつて美味しいといつ噂が出て、誘拐事件が多く

でるようになり、

政府は教育機関にこんな制度を与えました。

- ・3歳未満のお子様：親の同伴を強制 15時以降は家から出さない
  - ・幼稚園児…親の同伴を強制
  - ・保育園児＆保育所…終始、警備を設ける
  - ・小学生…授業は14時まで 先生同伴の集団登下校
  - ・中学生…授業は15時まで 集団登下校
- 高校生はあまり決まっていないが、女子と希望者は部活動の時間を制限するようになつた。

## 裏の組織

### どつかの悪い組織が

家族の誰かを殺し、その人になりきり、家族を暴走族やヤクザなどに売る組織があるらしい。

いわゆる、『偽者』が作られていくようだ。

…この組織は本編ではつづりさせます。

まあ、こんな感じです。

よく分からなくなつたら、また番外編に書きます

## 番外編1 この話の設定（後書き）

キャラの番外編を書いつと思っています。  
がんばります

## 番外編 2 セナの青・菊の白・ゲムファの赤・sakuの黒・柚原の緑（前書き）

キャラたちのサイドストーリーです。

意外なことが分かります。… そうでもないかな

## 番外編2 セナの青・菊の白・ゲムファの赤・sakusの黒・柚原の緑

### 『セナの青』

4月の始め、高校、中学校の入学式。

「お姉ちゃん！制服似合つてるよー。」

「そりかなあ？」

私、15歳。ナイトメア、12歳。

「ナイトメアの学ランも似合つてるよー。」

「ほんとう？」

「もう少し背が伸びたらねー」

「えーーーーあ、そういうばせ、」

両親も祖父母もいない。いるのは、弟のみ。

「柚原と同じ高校なんだよね？お姉ちゃん、ラブラブだね！」

「そんなんじやないわよー！ただ…」

祖母の家に住むことになった時から、柚原と一緒にだった。

「アーツのことを一番知つてるのは、私だけだから」

愛するモノは脆く、握れば壊してしまつ、奪おうとしないのが私の弱点。

### 『菊の白』

高校1年生、初めての昼休み。

「菊ちゃん…だよね？」

「え、うん」

「私、セナ！よろしくー。」

「…うん！」

高校に入って初めてできた友達がセナだつた。  
これがきっかけで、今日のうちに結構仲良くなつた私たち。

「セナー！クレープ屋行こばい！」

「お、いいねー！」

今が楽しければそれでいい、ただそう思った。

### 『ゲムファの赤』

高校1年生、初めての放課後。

「おー！人さん！どこに行くのかなあ？」

二人が仲良く喋っているとここに飛びついた。それはセナと菊だ。

「えつーと…」

「あたしゲムファ！変わった名前だけど、ようしくねー！」

大きく笑うと、あっちも笑つてくれる。

「面白いね！仲良くしよ？ゲムファ」

「んちゅー！」

あなたが受け止めてくれるなら、それに従うのみ。

### 『sakuの黒』

高校3年生、春。家のリビングにて。

また殴られた。お父さんがいないから、ヤツは私を殴る。

「食べたくない」

目の前に出された料理を散らかした。それで殴られた。

ヤツはお父さんがいない時だけ、私を殴る。よくできたものだ。血が繋がっていない義母の作るものなんか食べたくない。

私は部屋に籠る。ヤツの顔なんか見たくない。

私はセナに電話を掛ける。中学校のときからの友達だ。

『どうしたの？saku』

「あ…」

警察長のお父さんより、彼女を頼りにしている。

「明日、また話すね」

『？え、…「ん』

あなたの声を聞けるのが、唯一の幸せ。

『柚原の縁』

高校2年生、冬。自分の部屋にて。

またセナと喧嘩しちまった…なんでだ？セナは俺が嫌いなのか？  
小さい頃はあんなに仲が良かつたのに、最近はいきなり怒ったりするし…

「ぐあ～…腹立つなあ！」

考えれば考えるほど、君を好きになつていぐ。

番外編2 セナの青・菊の白・ゲムファの赤・sakuの黒・柚原の緑（後書き）

「ついで、この番外編は沢山書きたいですねー。うひや

## 8・あなたは知らないだけで

「…ああ

ちょっ…

柚原は私の顔を見ずに、警察の方へ向かう。

「あ…」

「ん？ セナちゃんじゃないか？」

sakuのお父さんが私に気付いた。

「ここで柚原の本当のことを言つたら、信じてくれるだらうか？」

「あの… ゆ、『セナには関わるな。』とつと連れていけ…」

柚原が大きな声で私の声を消した。

その言葉を残し、家から出て行く。

パトカーに乗せられる柚原を、ただ見るだけだった。

柚原が作った夕食を食べる。

家の中は静かすぎて、不安で涙が出そうになつた。

アイツはちゃんと本当のことを言つんだらうか？

もし『偽者』がいるなら、アイツは無実…といつか、罪は軽くなる

はず。

でも、『偽者』が現れた時には…私は殺される。

「柚原…！」

私はあることを思い出した。

「もしもし？ 菊ちゃん」

『セナ？ あー今、柚原の家にいるんだつけ？ sakuから聞いたよ  
「その柚原なんだけビ…」』

『はあ？ 警察に捕まつたあ？ 今時万引きするとか… アホするなー』

「うん… そーだね」

あえてナイトメアのことは言わず、一人でいるところを伝えた。

「菊ちゃんに聞きたいことがあるの」

『何?』

「前に、『あの時は少子化が…』って言つてたの、覚えてる?」

『あー、言つたような気がするけど』

「あの時つて、いつのことなの?」

『これだけがどうしても気になっていた。』

『そりゃ…』

私たちが中学生のときだったかな…

少子化が偉い進んで、ある村には高齢者しかいないとかあったし。

あと不況だったな…物価が倍になつた時もあったからね。他には、震災があつて…過去最大みたいな。あと…

そこまでは覚えてる。

かなり困つた時期もあった。

「あと?」

『日本が一回潰れた…分かる?』

「!?』

日本が潰れた?…どうこうこと…それ?

私が知らない時間。<sup>トト</sup>これなのか?

『菊ちゃん…』

『私あまり思い出したくないんだよ…』

日本は数日間だけ、『活動を停止』したらしい。人間も交通機関も何もかも…全てが止まつた。もちろん、私はそんなことは知らなかつた。

「…」

『…セナ、電話切るね?』

黙り込んでしまった。一体、日本に何があつたのか……私の身にも……。詳しく述べたい。

私は勝手に柚原のノートパソコンに電源を入れた。ネットに数年前のことが書いてあるかもしない。

「大震災があつた年だから……」

数少ない記憶を頼りに、色々なワードを検索してみた。

警察署

「さあ、なんで殺したのか教えてもらおうか?」

「……」

狭い部屋に警察が2人と、パイプ椅子に座り下を向いたままの柚原。警察官が怒鳴るが、何も動じなかつた。

「おい!」

「一つ……聞いていいか?」

「なんだ?」

柚原はやつと顔を上げた。彼の微笑が、警察官の表情を変える。「自分以外の人間を食べたら、殺したことになるのか? また生えてくるのに」

他人を食べると、一時的だが血液に異常が見られるらしい。先程した血液検査で、ナイトメアを食べたことが分かつた。

政府は『自分以外の人間の心臓か脳を食した場合、死刑とする』と。『だが、ナイトメア君は肉片はどこにもない……全部食べたのなら、再生是不可能だ!』

「……いいこと教えてやるよ」

柚原は口の中を警察官に見せる。

「ん?」

「政府は心臓か脳を食べるの再生ができないと言つたが、……それよ

り、

それを喰つた奴の口の中は血が止まらないほど爛れるつてな。しかも、治るのに数週間は掛かる」

心臓か脳には特別な細胞があつて、それは唾液に異様な化学反応を起こすらしい。

柚原の口の中は、綺麗なままだった。

8・あなたは知らないだけで（後書き）

次話  
0608  
感想  
・誤字等受け付けます。

## 9・生き血の飲み方

## セナの学校の生徒会室

二  
曜  
だ

ひまひまひま  
かもがわ ! ! ! ! ! !

生徒会長3年生  
鴨川 女

会場掃除して下さる事

醫生術會長之年生子曰元男

お父が好きなんがないの、

せっかくの休日を使って生徒会室を掃除しようつてなったのに、何もしてくれない。

卷之三

警察署

「なんだと云う!?」

「……奴は腕は食べただと言っていますか」  
心臍や脳を食べた形跡は

警察長であるさとうのお父さん・たかしまさんはそれを聞いて顔を歪める。

「なら仕方ない！明日また調べるぞ！」

はい！

「…俺はどうなるんだ? もう、用は無いみな?」

取調べ室から出てきた柚原。

ナイトメアの『偽者』は賢かつたんだろう。自分の跡は残さなかつた。

『偽者』に…指紋はないのか？

「俺に心当たりがある」

「なんだ？」

「聞いてくれるのか？それと…」

セナには今後一切、絶対関わるな。

### 柚原の家

検索し続けていると、背景が真っ黒なサイトに辿り着いた。  
あの時の出来事というか、誰かの体験談みたいだ。  
その記事が更新されたのは、今から5年前。それにはこう書いてある。

『暗い。外が暗い。でも、今日は電気が点いている。ここは病院。精神科。』

ここは病院。妻がそばにいる。なんでだ。娘が死んだと泣いている。俺が殺したと言っている。なぜ？いつ？何も思い出せない。明日俺は違う病棟に移られるらしい。帰りたい。妻はどこかへ消えた。』

怖い…何この記事。

多分この男性は私と症状が似ているようだ。

彼が始めに言っている『暗い』というのは、『夢』みたいなもので、それを見ている時に自分の娘を殺した。だから思い出せない…と。私はそう考えた。

「あ」

次の日に、また更新してる。

『違う病棟には、年配の人や子供など、沢山いた。近くにいた男性に問う。

その人は自分の女を殺した、と言った。皆、誰かを殺してる。だが

ら、ここにいる。

もうパソコンを使うなと言われた。まだ思い出せそうにない。帰りたい。』

それ以降の更新は無い…この人は今どうしているのだろうか。他のサイトにも、この男性のよつなことを言つてる人もいた。誰かを殺して、その記憶が無く、精神科に連れてかかる。

私も…誰かを殺したのかな?

ピンポーン…

「！？」

家のチャイムが鳴つた。

まさか『偽者』のナイトメア！？…それとも柚原？ドアにチャーンを掛け、隙間から覗く。

「あの…」

「あ！夜分に『めんなさい！

柚原さん居ますか？俺、大巻高校副生徒会長の子トラつていいます！」

え…聞いたことがある名前だ。大巻高校は通つている高校の名前。私はチャーンをはずし、姿が全部見えるまで開いた。

「あの…柚原は今居ないんですけど？」

「あなたは？もしかして、セナさんですか？」

「知つてるの？」

「後で家に寄るつと思つてたんですね！」

「？」

持つていた鞄の中から、書類を2枚取り出した。私と柚原の分。

一旦、書類に目を通す。

「少しの間だけ、お話をさせんかね？」

子トラはニッコリと笑つた。

## 9・生き血の飲み方（後書き）

次話 0610（10時）  
感想・誤字等受け付けます。

## 10・癒えないモノ（前書き）

やつと10話田だーー！  
子アリヤ姫は絶対可愛ーー！

## 10・癒えないモノ

柚原の家に、高校の生徒会副会長の子トラがやつてきた。

「話を簡潔に言いますと、兄弟か姉妹の確認に来たのですー。」

「はあ…」

まだ一々口一々口しているよ…。田の前にお茶を出すと、深く頭を下げてきた。

そう…可愛い。子トラは学校一カツ「カワイイで有名だ。  
金髪で整いすぎた童顔…長身で…まあ、可愛い。（上手く表現がで  
きない）

全校集会でしか見たことなかつたな…。

「あの、私の弟は…」

「？」

「誰かに…食べられてしまつて」  
「えー？」

私はどんな顔をしていたのだろうか…。  
子トラが異様なぐらい焦つている。

「具体的に…覚えてますか？」

ポケットからメモ帳とペンを取り出し、スタンバイする。

私は柚原から聞いたことを話した。

「…で、ナイトメアに似た人が」  
「そうですか…。あ、柚原さんは？」

「今出掛けで…」

いくらなんでも警察に捕まつたなんて言つたら…。

すると、 ガチャ

玄関のドアが開く音がした。

「ー…柚原！」

「セナ…誰だてめえ？」

「こんばんわ！生徒会副会長の子トラっていいますー。」

警察は再度調査することになり、柚原は帰ってきた。

私は子トラが来た理由と、ナイトメアが食べられたことを伝えたと言った。

柚原は関係なさそうな顔をしている。

「柚原さんって、妹さん居ますよね？」

子トラが聞くと、きょとん顔をした。

私も前に似たことを聞いたから、驚いたのだろう。

「居ないよな…？セナ？」

「私に聞かないでよ！」

「おかしいですね…戸籍上では居るんですけど」

子トラは何枚にまとめられた書類をめくり、柚原のを探す。

その書類には生徒の個人情報や詳しい家族構成が書いてあった。

そして、柚原の書類の家族構成には『妹 折鶴おりづる』と記されている。

「あ！折鶴ちゃんだ！遊んだことあるよ！」

私は思い出した。昔、柚原が休みの日に折鶴ちゃんを連れて、我家に来たことがある。

ナイトメアの妹分つて感じで、仲が良かつたのを覚えている。

だが、柚原は首を傾げて…思い出せないのかな？

「俺は…知らないな」

「…ですか」

子トラは大きく溜め息をついて、『妹 折鶴』の文字の上に2本の横線を引いた。

私は子トラと柚原の顔を交互に見る。

「なんで消すの？柚原が覚えてないだけで、どこかに」

「多分、妹さんは死んでます」

「…？」

子トラは柚原を睨むように見つめる。

「あなたが殺しました」

「…は？」

書類を鞄にしまつと、子トライは口を開く。

私には理解ができない。柚原が折鶴ちゃんを殺したの？

「セナさんも柚原さんも知っているでしょうか？…数年前のあの出来事を」

「「うん」」

「これは…色々な方に聞いた話で、本当ってわけでもないんですが

…」

子トライは話し出す。私が知らない、あの時の出来事を。

## 10・癒えないモノ（後書き）

次話 0612（10時）  
感想・誤字等受け付けます。

子トラはノートを開き、調べたことを読み始めた。

日本国民は、あまりの不況や不幸が続いて、鬱になる人が増えた。その人の精神は崩壊、自分の家族を躊躇なく殺した。

目が覚めても、自分が殺した家族のことを思い出す人はいなかつた。国民は記憶を失っている人のことを、『眠っていた人』と呼んだ。医者は聞いた。「どのくらい眠っていた?」かと…。数日と答える人もいれば、数週間、数か月、数年と、言う人もいた。答えは皆曖昧。もちろん、本当の期間なんて誰も知らない。

「え…?」

「医者もまた…いや、国民全員が『眠っていた』から  
「!?」

頭の回転がいい人や幼い子供は、鬱の回復が早かつた。治つた人が『眠っていた人』の回復に努める…つていうことになった。

「子トラ…正確には、何年前の話になるんだ?」

「俺の予想では6年前で、完全に『眠っていた人』がいなくなつたのは3年前ですね」

私は子トラが持つてるノートを見せてもらつた。

そこには細かい年表みたいのが書いてあつた。

それと、人口ピラミットの図。不況の時より、3年前の時の方が高齢者が減つている。

死んだのか、殺されたのか…。菊ちゃんが言つてた『子供が増えた』つて、子供の数が増えたんじゃなくて、高齢者が減つたのかな?

ん?

私は一つの矛盾点に気付いてしまつた。

最低でも3年前には、皆が目覚めてる…。

私にもその頃の記憶がある。高校の入学式とか……。

その前のことはあまり覚えてない。いや、そんなことより私には……

「子トラ君、一つ聞いていいかな?」

「はい?」

「私ね、『人肉食用化』の法律が実施される前の記憶がないんだけど……」

「……?」

「そうなのか?」

「……うん」

「セナ、今のところ皆勤だよな?」

「うん」

「学校でも結構前から話題になつてたぞ?……聞いたことないのか?」

「うん……。言つたじやん、柚原が新聞見せてくれた時に初めて知つたつて」

「……」

柚原と子トラは茫然としている。

二人の話からだと、『人肉食用化』の話題が出てきたのは、

私が高校2年生の夏ぐらいからだつたらしい。

「学校で過ごしてた思い出はちゃんとあるけど……この法律を知つたのは、最近のこと」

自分の発言を不思議に感じた。

高校2年生……。夏は友達と海に行つて、冬は修学旅行でハワイへ行つた。

全部思い出せるのに、法律のことは全く思い出せない。

まるで、その『人肉食用化』だけが、記憶から切り取られたような

……。

「……」

「あの……」

「セナさん。今度、学校で詳しく聞いてもいいですか?『あつちの

世界』の「こと」

「え？」

「それもまた詳しく教えますね」  
子トラは出した書類やノートを鞄にしまうと、一礼をして玄関に向かつた。

「もう帰るのか？」

「はい。…セナさん、また後日に」

「シコリ」と笑つて、家から出て行つた。

## 11・あなたのじこかに（後書き）

次話 一時更新停止  
感想・誤字等受け付けます。

## 12・何を奏でる（前書き）

久々の投稿になります。  
止めてしまつてごめんなさい！

## 12・何を奏でる

柚原の家で一泊して、朝、一度自分の家に帰り荷物を取りに行つた。少しの間、柚原の家に居座ることにした私。まだ家には血と悪臭が残っている。

制服に着替え、大きな鞄に衣服と日用品を入れた。

「ねえ、柚原の家に寄つてたら、学校間に合わないかな？」

部屋の前で待つている柚原に話掛ける。

私が一人になると危ないので、ついてきてくれた。ちょっと嬉しい。

「ギリだな。鞄が重くなるなら、置きに行つてもいいぞ」

どっちでもよかつたが、家に寄ることを諦めた。

2人で歩く通学路。なんか静かだつた。

急いで走つてゐるサラリーマンのスーツの袖から、チラリと包帯が見える。

自分を傷つけてまで、食べたいと思えない。目を逸らすと、体が身震いした。

『偽者』が残したナイトメアの臭いが、自分の感覚を悪くした。クラスに着くとまだHRは始まつておらず、皆はお喋りしていた。元気そうだが、包帯をしてる人が目立つ。5月にもなり、袖を捲る人が増えたからか。

「セナ！」

sakuが私に声をかけた。

さつき子トラがクラスに着たらしい。私に用があると。

放課後、別校舎の生徒会室に行くことにした。

そこに、ソファに座つてゐる子トラ。向かいのソファーに案内され、恐る恐る座つた。

「…用件は？」

「今日、同じクラスの菊さんは来られましたか？」

あ…

「来てないですけど」

菊ちゃんが学校を休むなんて、珍しいことだった。

「本日、菊さんはお亡くなりになりました」

「え…えええ…？」冗談言ひのやめてくれない…？」

ガラツ

「冗談じやねーよ」

仏頂面で生徒会室に入ってきた、生徒会長の鴨川。部屋の端にある一人掛けのソファーに豪快に座ると、大声で笑い出した。

「誰も女王に勝てねえよ…！アッハハハハ…！」

「会長！それを言つては…」

子トラが焦り出す。

「…『女王』つて？」

「この人喰いの法律考えたやつだよ。政府よりも、天皇よりも権力がある」

鴨川は笑いを堪えるのが必至な顔をしている。胸ポケットから1枚の写真を取り出し、私に差し出した。そこには腹部の臓器がむき出しの死体が写っている。しかも、「菊ちゃんだ…」つづ

吐き気と同時に写真を床に捨てた。

鴨川は再びソファーに座り、足を組む。

「女王に勝てるのは、接することができない私らぐら」だ

「！？？…え？」

ドヤ顔で私を睨む鴨川。

「私と子トラは、女王唯一の手下だ」

## 12・何を奏でる（後書き）

次話 未定。（10月以内）  
感想・誤字等受け付けております。

短編を別で考えております。

### 13・誰も触れなこよひな（前書き）

色々遅くなりました！

カメさん更新になりました…

鴨川さんは 北 景子 www

### 13・誰も触れないような

女王は家族の一人を殺して、『偽者』を作りだし、家族に馴染ませる。

そして、残りの家族を誘拐して女王の食用とされる。味見して女王が気にいったらその人の体全てを食べられ、不味かつたら暴力団に売り飛ばされる。

「…鴨川さんたちは？」

「私と子トラには弟がいてな、いつの間にか『偽者』に入れ替わつてて、

目が覚めたら女王の前で寝てたよ」

「…」

「両親は隣で脳と心臓だけ喰われて死んでたよ」

「ちょ…」

「私の味は良かつたみたいでね、腕をムシャムシャ喰つてたよ…子トラも一緒」

鴨川は子トラに視線を送ると、子トラは右手で自分の左肩を思いつきり叩いた。

ズズッ…鈍い音が小さく鳴り、肩から垂直に左腕が落ちた。袖が赤く滲み出しだが、子トラは笑っていた。

「！？？」

「脆くなつてきちゃつた…会長」

「女王に言え」

子トラは腕を拾つと、再び肩に戻した。

「う、腕が…」

「女王は欲張りで、美味な僕たちの脳や心臓を食べたくないみたい。週に数回、こりやつて腕や体の一部を差し上げてるんだ」

「何回も切つてるから…回復しづらくなつてきたな」

鴨川は微笑すると、窓から外を眺める。

外はだんだん暗くなつてきた。

「私たちも時間の問題だ。飽きられたら食べられる」

「…」

黙り込んでしまつた。

私は女王の正体なんて知らない。

でも、こんな強気な鴨川さんでも恐れる存在なんだ。

だけど…この一人だけが女王を倒すことができる。

この惨い法律も！

「あんまり沈むんじゃないよ…。生きてただけでも良かつたから」

「うん…」

「実際にはセナさんに協力してほしいことがあつて来てもらつただけなんです。

あなただけが知つてる記憶…でも、その前に「子トラがドアを見ると、柚原が入つてきた。

「柚原！？」

「色々と調べて分かつたことがあつたんです」

「私たちはあくまで女王の食糧。だけど、そこまで酷い奴じやない。

質問すれば、ちゃんと答えてくれる」

「……ゆ」

「柚原あ…お前、女王と身内の関係にあるんだつてな？」

「…？」

「…」

柚原は無表情で鴨川を睨む。

この空気に嫌気が出たのか、子トラが焦つている。

私は真相を聞こうとした途端、激しい頭痛に襲われた。

13・誰も触れな<sup>い</sup>ような（後書き）

次話 11日（10時）  
感想・誤字等受け付けます。

14・耳がなくちや聞こえない（前書き）

ナトラ君モテルは溝端 平君で WWW

## 14・耳がなくちや聞こえない

「……」

変な頭痛のせいで倒れ、私は先生がいない保健室に運ばれた。外はもう夜だった。

「大丈夫ですか？会長が力持ちでよかつた」

「黙れ」

「……柚原は？」

「帰つたよ」

柚原は倒れた私を気にすることなく、無言で帰つたらしい。悲しい思いがこみ上げて泣きそうになつたが、我慢した。

「あれだつたらタクシー呼ぼうか？」

「……」

「あ！」

子トラはセナの沈黙を受け取つて鴨川に話した。

今セナの家は入ることが出来ず、柚原の家に住んでるといつひとを。

私は柚原の顔を見たくなかった。正直にいつと帰りたくない。

「……私たちの家に来るか？」

「へ？」

鴨川の提案に、子トラは何故か喜んだ。

「ここに住んでるの」

「ほえ～」

目の前にあるのは高層マンション。

この辺りでは一番デカいマンションだ。

「私と子トラは死んだ親の金出しあつて、最上階に住んでるの」「すゞ～え？……一人つて付き合つてるんですか？」

「いいや。お互いいい人はいるよ」

鴨川は優しく笑い、手招きした。

セキュリティーがちゃんととしていて、指紋と顔の認証装置があつた。ロビーの床が大理石で、もの凄く豪華な作りだ。

エレベーターで最上階に着き、私は驚いた。

ドアが一つしかない……、

「まさか、最上階全部が部屋なんですか！？」

「や、そうだけど」

カードキーで開けると、美しい夜景と綺麗なリビングが一面に広がつた。

セナはそこまで裕福な家庭で育つたわけでもないし、友達に大金持ちがいるわけでもない。

リビングを一周し、お風呂を見たり、トイレを見たりと、はしゃぎまくつた。

「sakuの家も広かつたけど、やっぱ夜景があると違うなー」

子供のようなセナを見て、鴨川と子トラは笑つた。

セナは柚原のことなんかどうでもよくなつていた。  
それから子トラとゲームしたり、鴨川と一緒にお風呂に入つたりと、久しづりに友達と遊ぶ感覚だつた。

「ふー！お風呂気持ち良かつたあ！プールみたいで」「人ん家の風呂でバタ足する奴初めてだわ」

笑いあつて、お菓子を食べながらテレビを見ていると、いつの間にか深夜を過ぎていた。

「もう寝るかな。セナは私の部屋において」

「会長ー！3人で寝ましょーよー」

「何言つてんの？子トラは自分の部屋！」

まだ遊び足りないのか、子トラは寝るのが惜しそうだつた。  
鴨川の部屋は広く、真ん中に大きいベッドが置いてある。

「今布団持つてくるから、ちょっと待つてて」

そう言つて鴨川が部屋から出た途端、セナは柚原を思い出した。  
(明日学校で会いたくないな……ー)

「セナー、このタオルケットでいいかな？」

「鴨川さん、明日、学校の創立記念日で休みですよね？」

「そういえば、そうだね」

安心した。鴨川は布団を敷き、セナと田を合わす。

「明日、女王に会おうか？」

## 14・耳がなくちや聞こえない（後書き）

次話 14日（10時）  
感想・誤字等受け付けます。

## 15・私の居場所（前書き）

今回短めになりました。

「女王……」

「朝、子トラと相談してみるね」

「……うん」

鴨川はセナが布団に入ったのを見て、電気を消した。

フリルのエプロンを着て朝食を作る子トラ。

私は不思議な光景に思つたが、楽しそうだったので何も言わなかつた。

テーブルに次々と料理を運ぶ。

フレンチトーストにスクランブルエッグ、サラダと特製フルーツジュース。

「おいしそう！子トラ君が毎日作つてるの？」

「はい！会長は朝弱いですから……」

「そういえば爆睡してたな……」

「せつかく学校がないんだし、寝させてあげてください」

「うん！」

子トラの椅子と向かい側に座る。

久しぶりにまともな朝食を食べた気分で、自然と笑顔になつた。

「子トラ君、鴨川さんに女王に会おうって言われたんだけど……」

「え……」

鴨川はまだ寝ている。子トラは食後のコーヒーの準備をした。高そうな洋菓子店の箱から、マフィンを取り出す。

無言でセナの前に置いた。

「前にも言いましたが、セナさんは僕たちにはない記憶がある

「……」

「あるって言うか……、セナさんはこの『法律』の存在を知らない、

謎の空白があります

「でもそれって、法律が始まる前に一部の人が人殺ししたことを覚えてないってやつと、

一緒にやないのかな？」

「それとは別つていうか……んー……」

「お前はどこの世界にいたのか……って、ことだよ

「！？」

鴨川がお腹をボリボリと搔きながら、セナを睨んだ。パラレルワールドって知ってるか？鴨川は続けた。

15・私の居場所（後書き）

次話 19日（10時）  
感想・誤字等受け付けます。

## 1-6・サハ1の日本（複数形）

この句にかかる終盤です。

女王は前に言ってたんだ。

『別の日本にいる一人の人間を連れてきた』って。

そいつはこの日本が不況になつたのも、法律が出来たのも知らない。法律が開始されたと同時に、

「私が来たつてこと?」

「…」うちの日本にいるセナと入れ替わつたんだ。

パラレルワールドは世界観が違つだけで時間は平行してゐる

「なんか複雑…」

「逆に言つなら、今あっちの日本にいるセナは、不況の事も法律の事も知つてゐる」

「でも私は、鴨川さんが会長つてことも知つてゐるし、柚原や友達も…」

「…」  
「多分、あっちの日本と近い作りになつてゐるんだね、うちの日本は」

「…」  
「そういえば、あっちの日本は不況には程遠かった。

少しの貧富の差はあつたが、物価や消費税が高くなつたわけでもない。

特に不自由のない日本だった。

鴨川はコーヒーを飲み、一息つく。

すると子トライは、セナに頭を下げた。

「『めんせない! セナさんが記憶がないつてことを聞いて近づいたんです!』

危険な目に合わせたくないんですが…

「…」  
「…関係あるの?」

「女王が言つにせ、そつだけがこの法律を変えることができるか

うん」

「…」

「どうしてなのか分からぬけど、セナが法律を変えて、  
私と子トラが女王を殺す」

昼食を食べ、女王の場所へ向かつ。

着いたのは、古めの洋館だつた。

「入るよ」

「…待つて…」

門を開けようと鴨川を止めるセナ。

「私がいた元の日本にいるナイトメアや菊ちゃんは…死んだの？」  
鴨川は表情を変えずに頷く。答えは分かつていても聞いてしまつた。

あつちの日本に戻れたとしても、誰も救えない。

門から家までが遠く、その道が所々血で赤くなつていて、

ドアを開けると、広い空間に黒い影が一つ。

「ぐくりと、唾を飲む。

「女王、連れてきました」

「…」

声が聞こえない…なんか喋つてるみたいだけど。

「あの…」

「セナちゃん…？」

「……は…？」

少し高くて、小さい声。

聞いたことのある声だった。

私は疑つた。この声の持ち主を知つていて。

「まさか…」

「こんな形で会うなんて、思わなかつたね  
この人が女王なんて、想像もつかなかつた。

## 16・むかいつの日本（後書き）

次話 25日（10時）  
誤字・感想等受け付けますか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3591t/>

---

人は食べ物です

2011年11月20日01時13分発行